

1. はじめに 長濱ねると図書館・続
2. 続巻の刊行—2021
  - 2-1 『本バスめぐりん。』  
『めぐりと私。』
  - 2-2 『麦本三步の好きなもの』  
『麦本三步の好きなもの 第二集』
  - 2-3 『虹いろ図書館のへびおとこ』  
『虹いろ図書館のひなとゆん』  
『虹いろ図書館のかいじゅうたち』
3. 『図書室の奥は秘密の相談室』
4. 『ライブラリー・ツインズ ようこそ、月島大学図書館へ』
5. フィクションに描かれた多様な図書館
6. おわりに

1. はじめに 長濱ねると図書館・続

前号で、長濱ねるについて、「『けやき坂46（ひらがなけやき）』のオリジナルメンバーで、兼任を経て、『櫻坂46』の専任となり、後に芸能界から離れていた」が、「2020年7月、テレビ番組『7 RULES セブンルール』で、芸能界での活動を再開し、その後も、さまざまなメディアで、情報を発信してきている」と紹介したが、1)以降も、長濱ねるは、多様な内容の図書館に関係した情報を公開してきている。

たとえば、雑誌『with』では、インタビューで「この仕事をしていなかったらどんな仕事をする？」に対して「図書館の司書の先生」と回答していた。2)また、テレビ番組『メレンゲの気持ち』に出演した際の発言として、図書館司書の資格を目指して勉強中であると語っていることが紹介されていた。3)

雑誌のインタビューでは、前号でもふれたが、ロアルド・ダールの『マチルダは小さな天才』で、天才少女のマチルダが4歳で、図書館の本を読み尽くしてしまうという物語に憧れて、「私も！ って思いましたね。ですが、さすがに全冊読破はできませんでした（笑）」と話している。4)

前稿の「はじめに」の末尾で紹介した、『ダ・ヴィンチ』に連載しているエッセイ「夕暮れの昼寝」では、子どものころの読書や図書館とのかかわりについて、「私が人生で1番本

を読んでいた時期は、間違いなく小学校の6年間だ。昼休みは、がらんとした図書室で司書のありよって先生と談笑するのが毎日の楽しみだった。次は何の本読もうかな、この本いれてください。美人さんと本に詳しいありよって先生は私の憧れだった」「“司書の先生”小学生の私が初めて認識し、興味を持った職業だった」「放課後は近所の図書館に通った」としている。5) また、ほかの号では、コロナウイルスの影響が拡大する前に、海外の図書館を訪問した際の印象について文章にしている。雑誌のインタビューでは、「特に憧れているのは、ブラジルの『王立ポルトガル図書館』ですね」6) といっていたが、実際に訪問したのは、オーストラリアの「ビクトリア州立図書館」。この時の様子については、「去年（注・2020年11月号に掲載された記事なので、これは2019年）、一人でオーストラリアのメルボルンに2泊4日の旅行をした」「2日目はメルボルンに行くことと決めた最大の理由であるビクトリア州立図書館に向かった」「ようやく目的地にたどり着いた」「ただただ圧巻だった。時間を忘れて突っ立っていた」「今後の人生、もっともっと世界中の図書館を巡ろう、そう決意しビクトリア州立図書館をあとにした」と記述されている。7) メディアに登場する20代の女性として、これほど、継続的に、図書館に関するテーマについて言及している人物は、これまで、ほとんど見られなかったといえるくらい、長濱ねるは図書館に関する情報を発信してきている。

注)

1) 佐藤毅彦「2021年 コロナウイルスと図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.68、2021.3、pp.77-116

2) 「長濱ねるに10の質問！」

「Q4 この仕事をしていなかったらどんな仕事をする？」「図書館の司書の先生」

『with』2021.4

<https://www.youtube.com/watch?v=kfBFvaPigcg>

(公開終了)

3) 「長濱ねる、将来の夢は「本屋の店長」図書館司書の資格に向けて勉強中!？」

『メレンゲの気持ち』日本テレビ

<https://www.rbbtoday.com/article/2021/02/20/1>

(公開終了)

4) 「長濱ねる、本で愛を語る。“図書館の本を全部読み尽くしてしまった”伝説の真相」

『bis』2021.02.27

<https://bisweb.jp/interview/108717>

上記の記事については、以下でも紹介されている。

「長濱ねる：愛情たっぷり日本の魅力を語る “愛にあふれた” オススメ作品も紹介」『毎日キレイ』2021年02月01日

<https://mainichikirei.jp/article/20210201dog00m100012000c.html>

- 5) 長濱ねる「朝ごはんから始まる夢 夕暮れの昼寝 第六寝」『ダ・ヴィンチ』2021.3、pp.164-165
- 6) 「長濱ねる、仕事に対するマイルールと今やりたいこと 『素直に生きていくのは難しいけど、すごく大事』」『ザ・テレビジョン』2020.9.24  
<https://thetv.jp/news/detail/244126/p3/>  
<https://thetv.jp/news/detail/244126/p4/>
- 7) 長濱ねる「海の向こうの図書館にて 夕暮れの昼寝 第二寝」『ダ・ヴィンチ』2020.11、pp.148-149

## 2. 続巻の刊行—2021

前号で、2020年に、図書館を扱っている小説の続巻が刊行された事例について、『図書室のバシラドール』1)、『司書のお仕事 本との出会いを届けます』2)、をとりあげて紹介したが、2021年にはいっても同様のケースが見られた。

注)

1) 竹内真『図書室のキリギリス』双葉社、2013

竹内真『図書室のピーナッツ』双葉社、2017

竹内真『図書室のバシラドール』双葉社、2020

2) 大橋崇行・著、小曾川真貴・監修、こよいみつき・イラスト『司書のお仕事 お探しの本は何ですか?』勉誠出版、2018

大橋崇行・著、小曾川真貴・監修、こよいみつき・イラスト『司書のお仕事 本との出会い届けます』勉誠出版、2020

### 2-1. 『本バスめぐりん。』『めぐりんと私。』1)

『配達あかずきん』でデビューした後、書店や出版関連業界を描いた作品を多く手がけてきた大崎梢が、架空の自治体「種川市」の移動図書館を舞台とした『本バスめぐりん。』を発表したことについては、すでに考察の対象としてきたが、2)その続編にあたる『めぐりんと私。』が刊行された。前作と同様に、移動図書館の担当者である、司書の「ウメちゃん」、主に車の運転を担当する「テルさん」などの職員と、移動図書館の利用者に関するストーリーが展開されている。

東京創元社のホームページにある「内容紹介」では、

「三千冊の本を載せて走る移動図書館「本バスめぐりん」との出会い、屈託を抱えた利用者たちの心を解きほぐしていく。家族の希望で縁もゆかりもない土地で一人暮らすことになった節子の、本と共に歩んできた半生を描く「本は峠を越えて」や、十八年前になくしたはずの本が見つかったことを引き金に当時の出来事が明るみに出る「昼下がりの見つけ

もの」など5編を収録。めぐりんが本と人々を繋ぐ移動図書館ミステリ、シリーズ第二弾。」と紹介されている。

『めぐりんと私。』は、「本は峠を越えて」「昼下りの見つけもの」「リボン、レース、ときどきミステリ」「団地ラブツェル」「未来に向かって」の五話からなる。以下では、おもに「本は峠を越えて」「未来に向かって」の二作について、検討した。他のストーリーは、「昼下りの見つけもの」は、住居の天袋から発見された種川市立図書館の蔵書である二冊の児童書にまつわる話、「リボン、レース、ときどきミステリ」は、会社が集まっているワーキングエリアのステーションを利用する女性と、同じ会社に勤める読書好きな男性社員をめぐると、「団地ラブツェル」は、七十歳をこえた同級生のおっさんふたりが移動図書館のステーションで再会し、小学生と交流する話、となっている。

「本は峠を越えて」

#### ◎子どもの頃の自動車文庫との出会い—1950年代③

「生まれは栃木県」「昭和二十二年に生まれ、今年七十二歳になる」という（永山）節子が「六歳の夏、村に初めて『自動車文庫』なるものがやってきた」。その時代には、「文庫といえど本のことを指していた」。近所のおじさんたちは「借り賃のかかる貸本屋だと噂した」。「村一番の物知りである祖父は宇都宮にできたという県立図書館の話をしてくれたが、遠い町にあるりっぱな建物よりも、村に来てくれる自動車文庫のことが知りたい」。「やがて本を借りるのにお金はいらぬという耳寄りな情報もたらされ、村のみんなはどよめいた。節子も興奮した」。「節子には弟も妹もいるので贅沢は言えず、はなから諦めていたところ、『ただ』だ。「お役所から通達があり訪問の日時が発表された」。そして、当日、三十分ほど遅れて、それらしき車が現れ、「ごつくて大きな長四角の車」で、「きびきびと現れた職員たちは短い挨拶の後、車の中から箱を手際良く下ろしてゆく。箱には本が詰まっていた。車内にも本が設えられ、あらゆる分野が揃っていることがわかる。そのどれも借りることができて、お金はかからない。三週間後にまた車が来るので、そのとき返却すればいい。手を合わせるお年寄りたちを笑うことはできなかった。たしかにとても素晴らしい」。「戦争が終わり新しい時代が来ると大人たちはよく言っていたが、節子にすればそれを目の当たりにした日だった」（pp.8-10）といったように、自動車文庫の運行開始とそれを迎える側の状況が描写されている。

この、栃木県立図書館の自動車文庫については、のちに神奈川県種川市（架空の地名）に居住するようになった節子が、種川市の移動図書館『めぐりん』の職員である、ウメちゃんやテルさんと、当時を回想して『私は栃木の山奥の出で、子どもの頃に本を載せた車が巡回するようになりました』と話している場面がある。女性職員で司書のウメちゃんは、今の移動図書館が当時は、自動車文庫、BM、ブックモービルと呼ばれていたことを紹介し、「『昔と今では移動図書館の意味もちがったんですよ。今は図書館の遠い地域に便宜を図るために、本を載せた車が走りまわっていますが、昔はもっと強い意義や使命があったんで

す』と、おもに移動図書館の車の運転を担当しているテルさんに説明している。栃木県は、戦前には公共図書館がなく、戦後すぐ県立図書館が建てられ、厳しい財政の中から予算をひねり出し、本を運ぶための車を買ったことをウメちゃんは語り、テルさんは『今ではたいどこの市町村にも公共図書館がある。その機能を補完すべく、移動図書館を活用しているところがある』『でも昔は建物の役割を車が担っていたのか。補完ではなく』と納得する (pp.14-15)。その後の状況については、『自動車文庫は長いこと利用されていたんですか』『いいえ。町中に図書館が建つようになり、次第に減っていったと思います。ずいぶんあとになって、「役目を終えた」という広報か何かの一文を見ました。県立図書館としての自動車文庫なり、移動図書館なりは、終了したんだと思います』といったやりとりがあり、「公共の図書館が各市町村ごとに増え、好きなときに訪れて自由に本を選らえるようになったことで、移動図書館は補完の役割を担う。本来のあるべき姿が実現したのだ」とされている (p.17)。一方、「あの頃の巡回訪問は四週間に一度、あるいは三週間に一度。時間も三十分から長くても四十分ほど。急いで本を選び、貸し出し手続きをしなくてはならない。利用者が増えれば個別に対応する時間がなくなり、やがて村に世話人を置いての『集団貸し出し』が始まった。車の書棚から好きな本を選ぶのではなく、世話人が代表して本の詰まった箱を受け取る仕組みだ。住民はそこから読みたいものを見つける。選択の範囲は極端に狭まるが、当時の『個人貸し出し』は一冊か二冊。箱ならばだいたい五十冊が詰まっている。次の巡回日まで借りて返してをくり返せば、いろいろ読めるというメリットはあった」。「その一方、村の人が間に入って世話をするので、誰が何を借りたのかは筒抜け状態だ。読書の苦手な節子の母は、自動車文庫の手伝い役を買って出た義姉の手前、形ばかり料理や手芸の本を借りるのだけれども、たまには小説を読みなさいとからかわれ、たいそうふさぎ込んでいた。母の代わりに節子が読み、無難な感想を教えることはたびたびあった」。「母のことを思い起こせば、自動車文庫を褒めそやしてもらえない。無料で貸してくれる本の出現に読書熱は高まり、村の文化度は押し上げられたのかもしれないが、熱気は往々にしてひずみを生む。無理強いや仲間はずれ、静いかなかったとは言い難い」というように、貸出のありかたについて、問題となるような状況もあったことが述べられている (pp.18-19)。

◎高校進学、就職、結婚、離婚、を経て栃木県内でひとり暮らしの時代—1980年代5)

その後、節子は、県立高校に合格し、「学校図書館をよく利用」した (p.19) が、高校卒業後は、信用金庫に就職し、二十二歳で同じ職場の男性と結婚した。しかし、子どもが生まれなかったことなどが理由で、二十九歳のときに離別して、いったんは実家に戻ったが、栃木県内の「石波駅(架空の地名)」の近くのスーパーに勤務し、アパートを借りてひとり暮らしをするようになる (pp.23-26)。

その後は、「商店街の外れにある古本屋に寄り」「ワゴンセールの中から一冊を選ぶ」ことが、「ささやかな贅沢」という生活をしてきたが (p.28)、「買い物に出かけた帰り道」「アパートの前の公園に本を積んだ車が停車していた。引っ越しからかれこれ六年が経とうとし

ていた。懐かしい自動車文庫との再会だった。「自動車文庫のまわりには近隣の子どもたちや女性、お年寄りが集まり、貸し出しカウンターである長机が設置されていた。「ぐるりと棚を見てまわり、貸し出し票を作るための用紙をもらった。次の巡回日は三週間後。利用するための票を作ってもらい、目に付いた小説やエッセイを借りた」ということで、仕事の休みの曜日が変わったことがきっかけで、この地で自動車文庫と再会し、また、利用するようになっていく (pp.30-31)。ここで、子どもたちだけで利用していた男の子ばかりの三兄弟のめんどろをみて、クリスマス会などで交流するうちに、父親がこのアパートを紹介した不動産屋であったことがわかり、奥さんを病気で亡くしていたこの男性と再婚して、(斉藤) 節子となり、神奈川県大和市に転居する (pp.36-41)。

#### ◎種川市に転居、移動図書館「めぐりん」との出会い—2010年代

節子は、「昭和二十二年に生まれ、今年七十二歳になる」が、夫が亡くなった後も、大和市の一軒家を借りていたが、大家の都合で、契約の延長ができず、同じ神奈川県内の種川市(架空の地名)に転居する (pp.7-8)。コンビニに行った帰り道、公民館の駐車場で、「車のまわりに人影が見える。十人くらいいるだろうか」「車はマイクロバスのように車高があって、横長の側面は羽を広げるように持ち上がっている。開口部に見えるのは棚だろう。そこに本の背表紙がずらりと並んでいる。移動図書館の車だ。こんなところに来ているなんて。この町にそれが走っているなんて。ちっとも知らなかった」(p.7)と、ここで、また、移動図書館に出会う。「昔を思い出し、節子は駐車場の入り口で立ち尽くしていた」。節子は、女性職員(ウメちゃん)から声をかけられ、飛び上がりそうになったり、「年配の男性」で「定年後しばらく経った年頃ではないだろうか。七十を超した自分よりかは年下なのかもしれない」という職員(テルさん)と『何でも機械化の時代ですね』『昔は本の後ろページに小さなポケットがついていて、中に貸し出しカードが入っていました』『ええ。そうでしたね。学校の図書室もみんな厚紙でできたカードを使っていました』『本を借りるときは自分の名前や日付を書いて、係の人に渡して』『借りた人の名前がカードには残るので、どんな人が読んだのかわかってしまうんですよ』『たいていは知らない人の名前ですけど、たまに知った名前があるとドキッとしました』『わかります。見慣れてくるとしょっちゅう同じ名前に出くわして、本好きなんだなと感心したものです』『懐かしいですね。いちいち名前や書名を手書きしていたわけですから、手間といえば手間ですが、一冊ごとの履歴を実感できました』といった会話を交わしている (pp.11-12)。

この時は「ひととおりの陳列を見た後、節子は誰にもなく会釈をしてその場を辞した。市内在住ならば貸し出しカードはすぐ作れると言われたが、また今度と遠慮した」(p.18)が、「公民館の駐車場でめぐりん号を見つけてから」「二週間後の木曜日を意識するようになった。晴れたら散歩がてら。行ってみようか。久しぶりに歴史小説でも読んでみようか。単行本なら活字も大きい。カードを作って、バーコードを読んでもらおうか」(p.34)と考えようになり、「名前を呼ばれて顔を向けると、ウメちゃんが新しくできたカードを渡して

くれた。バーコードと種川市のマークがついている」(p.42)と、カードを作って、「貸し出しコーナーに四冊の本を置いた」。「借りた本を提げてしばらく歩き、振り返るとめぐりんが日の光を浴びて、ふっくら膨らんで見えた。利用者が本を抜いたので棚のあちこちに隙間ができています。明日はそこにちがう本をさして町に出るのだろう。その本を初めて知り、手に取る人がいるのかもしれない」(p.51)と種川市の移動図書館を利用するようになる。

現代の移動図書館の職員と利用者の対話をまじえて、利用者である節子の回想の中で、日本の公共図書館の移動図書館サービス開始時期のころの歴史的な状況とそれ以降の変遷が描かれている。

「未来に向かって」

#### ◎種川市図書館職員・速水典子の移動図書館との出会い 5)

速水典子の生まれは、神奈川県丸山市(架空の地名)の北部で、「田んぼや畑が広がるような田舎だった」。「本好きだったんだけどなかなか本屋さんにも行けず、子どもの頃に読んだのは保育園や小学校の図書室にあったものだけ。面白そうな本をほとんど読んでしまい、あーあ、つまらないなと思っていたら、三年生になったある日、小学校の校庭に見慣れぬ車が入ってきた。それがほんまるだった」。「二年生まで水曜日は給食を食べたら帰っていた」「三年生になって初めて午後の授業があった」「掃除当番を終えて外に出たら、ごとごとと車体を揺らしながらマイクロバスが現れた」。「子どもだから図書館の存在そのものを知らなくて、ポカンと立ち尽くした」。「中から数人の大人が降りてくる。車体の側面がふわりと浮き上がり、それを高く持ち上げてつかえ棒のようなもので固定する。羽を広げたカナブンのように見えた。羽の下にはびっしり本が並んでいた」。貸し出しカードを作って「学校の図書室に比べれば冊数は少なかったはずなのに、見たこともない本がたくさん並んで」「子ども向けの絵本や児童書だけでなく、英会話の本もあれば分厚い小説の本もある。お料理の本も園芸モペットの飼い方も。どれも借りていいと言われ」「それから指折り数えて、二週間に一度の巡回日を待つようになった」(pp.190-192)。そして、『あるとき、大きくなったら私もほんまるで働きたいと言ったの。その頃はまだ建物を知らなかったから、ほんまる＝図書館だったのよね。係の人はにっこり笑い、「司書の資格を取るといいよ」と教えてくれた』と、いうことがあり小学校のときに、「司書がなんなのかも、ちんぷんかんぷん」ではあったものの、それが「なりたいたいものになった」ことが語られている (pp.192-193)。

#### ◎速水典子が種川市の正規職員になるまでの紆余曲折と種川市での担当

司書であるウメちゃんは、テルさんに対して「今どき司書になるのはすごく難しい」ことを説明する。資格は取得コースを設けている学校があるし、通信でもとれるが、募集が極端に少ない。正規職員としての採用は限定され、欠員ができないかぎり募集しない。全国規模でも「年に数ヶ所、ほんの少数ずつしか公共図書館の司書にはなれない。大学や企業の図書館も似たり寄ったりで、若干名の募集に対して数百人が殺到する、といった、司書養成と

採用状況についての現状が語られている (pp.193-194)。

現在は、種川市の正規職員となっている速水典子は、「小学校三年生にして初めて図書館と司書という仕事を知り」「いつか自分も思うようになった」。「中学では学校の図書室をもっぱら利用していたが」高校では進路として第一志望に据え、図書館学のある大学に入った。6)「海外の図書館事情を研究テーマに選んで大学院に進学」「夢に向かって着実に進んでいると、典子自身も家族も思っていたのだが、卒業後の就職で躓いた。どこの採用試験に通らず、教授から推薦をもらった私立高校の図書室にも落ちた」。「選んだ学部も院での研究も充足感を与えてはくれた。学ぶという意味ではやり切った感がたしかにある。けれどそれらはすべて、図書館で働くための過程であったはずだ。悩んだ末、典子は大学院を卒業して間もなくの五月、非常勤の公共図書館職員になった。正規雇用の見込みのない場所で二年働き、契約が切れて別の図書館のパートタイマーになった。時給制であり、週四日しか勤務日がなかったので別のアルバイトを掛け持ちした。その間も正規採用の司書職を探し求め、募集を見つけると場所や条件に目をつぶって受けに行き、落ち続け、自分のように不採用を繰り返す人たちに多く出会った。みんな雇用条件の悪い中、図書館で働き、低賃金に喘いでいた。諦めて他の仕事に就くかどうかの瀬戸際にいた」。「公共図書館の正規職員になるには年齢制限がある。非常勤やパートタイマーにしても、司書職にこだわってはいは食べていくことさえままならない (pp.193-195) という紆余曲折が説明されている。

その後、「二十九歳のときに種川市の募集」があり、「採用通知」を受け取り、「最初に担当したのはレファレンス課」で、「調べたい事柄のある市民の相談を受け、蔵書から資料を紹介する仕事だ」「勝手はわかっていたが、図書館が替わると蔵書の内容も問い合わせの傾向も変わる。まごつきもしたし、ずいぶん先輩にお世話にもなった」。「二年目から資料購入に関する業務が加わった。予算内で新規購入する本と、買わずに見送る本との取捨選択をしなければならぬ。蔵書を頭に置きつつ全館の貸し出し頻度をふまえ、市民の興味や流行を反映させるのは、図書館員の腕の見せ所だ。利用者の増減に直結してくるのでやり甲斐はあるけれど、限られた予算の中で選ぶプレッシャーは半端なかった」(p.196) という。

丸六年が過ぎるころ、サービス課に異動したが、業務は多岐にわたり、分館や地域図書室の「リクエスト本の手配や棚の入れ替え、係員の雇用、公民館の行事に対する対応など」にくわえて、小中学校の図書室担当として、「正規職員ではないものの司書の資格を持つ人が各校にひとりずつ配属されている」ひとたちを「本館のサービス課がサポート」し、研修会や勉強会を実施したり、相談窓口となったり、図書館見学などの提案受け入れもしている。典子は、移動図書館の担当も兼任し、「載せる本の検討やステーションの見直し、バスのメンテナンス」「雨の日の運行判断など」を行っている (pp.197-198)。

#### ◎移動図書館の廃止とその後の展望

速水典子は「私の出身地、丸山市を走っている移動図書館の愛称が、『ほんまる』なんです」。「私も子どもの頃、よく利用していました」(p.190) という子ども時代に「司書を教え



てくれたスタッフさん」(p.200)がいたが、「日に焼けた大工さんのような風貌」(p.201)で、そのスタッフのシャツに「三ツ木進」という名札があったことを記憶していた。関東圏の図書館職員を対象としたサークルが開催した研修会のパネルディスカッションで、それと同じ名前の人が「オフィスにこもりがちになる司書を案じていた。意識的にフロアに出て図書館利用者を見てまわること、カウンターの職員と言葉を交わし、コミュニケーションを取ることの重要性を語っていた」。「その頃からすでに貸し出し作業や棚の整理などはパートタイマーに一任していたのだ」(pp.202-203)という状況であったことがその背景にある。四年前には、その人が「司書として四十代前半まで丸山市の図書館で働いたのち、学校教育部に移った」。そこから、他の部署を経て、「ごく最近、図書館も含まれている社会教育部に戻ってきた」と、サークルの会誌に綴っていたことを知る (p.203)。

典子は、その丸山市で移動図書館が廃止になる、という話を聞く。「ほんまの廃止がこたえるのは、ほんまのたどった道のりが図書館そのものの今後を暗示しているように思えるからだ。効率が悪く、時代にあっていない、経費ばかりかかる。それは図書館を必要としない人の口からしばしば聞かれる」。「学校、病院、消防署、保健所、道路整備、上下水道整備と、税収でまかなわなくてはならないものは多い。図書館よりも病院、水道だろうと言われれば、反論するのは難しい。移動図書館を走らせ、市町村ごとに本館を建て、分館を作り、利便性は上がったはずだ。けれど人口が減り税収も減り、どの部署も予算が削られていく。広げたものをたたんでいく未来が、迫っているのかもしれない」(p.206)といった、現代の図書館に対する批判的な見解も紹介される。

その後、典子は、小学校の同級生に連絡を取り丸山市の図書館について尋ねると、公民館がリフォームされ、図書館の出張所ができることを聞かされる。「棚に置かれる本は少ないが、司書が派遣され、リクエストした本を受け取ることも返すこともできるようになる。地域を回る巡回バスも整備され、公民館に停留所ができる」ことになる。限られた予算の中で何ができるか、地域住民を置き去りにしない方法を模索した結果であり、「今また図書館は岐路に立つ。娯楽は多様化し、知識を売る方法は多岐にわたり、人口は減り、予算は削られる。できることは限られていくのかもしれない。でもまだ動く余地はある」(pp.224-226)と、厳しい状況の中でも、図書館の持つ可能性が生かされる方向性が示されている。

注)

1)大崎梢『本バスめぐりん。』東京創元社、2016

大崎梢『めぐりんと私。』東京創元社、2021

<http://www.tsogen.co.jp/np/isbn/9784488028381>

巻末にある、東京創元社の自社出版物の広告ページでは、大崎梢の著作に加えて、

青崎有吾『図書館の殺人』創元推理文庫

リン・トラス、玉木亨訳『図書館司書と不死の猫』東京創元社

ソフィア・サマター、吉田泉訳『図書館島』東京創元社

デルフィーヌ・ミヌーイ、藤田真利子訳『シリアの秘密図書館 瓦礫から取り出した本で図書館を作った人々』東京創元社

が、紹介されている。

- 2) 佐藤毅彦「図書館の多様化とフィクションの中の図書館」『甲南国文』v.64, 2017.3, pp.1-22
- 3) 「昭和二十二年に生まれ、今年七十二歳になる」(p.8) という節子が、「六歳の夏」(p.9) ということから、このストーリーは 1950 年代のことと思われる。
- 4) 「昭和二十二年に生まれ」(p.8) という節子が「二十九歳のとき」(p.23) 離別してアパートを借り、「引っ越しから」「六年が経とうとしていた」(p.30) ということから、このストーリーは 1980 年代のことと思われる。
- 5) 「二十九歳のときに種川市」に「採用」(p.195) され、「最初に所属したのはレファレンス課」(p.196) で、「丸六年が過ぎるころ、サービス課に」異動した (p.197) という経歴で、「四年前にレファレンス課からサービス課に異動」(p.190) していることや、小学校三年生のときの移動図書館との出会いについて「かれこれ三十年も前の出来事」(p.191) とあることから、このストーリーの時点で、40 歳前後の年齢と思われる。
- 6) 「大学は茨城県」(p.200) とあり、「図書館情報大学 (2004 年 3 月に、閉校。筑波大学に統合)」(現・筑波大学) が想起される。

## 2-2. 『麦本三步の好きなもの』『麦本三步の好きなもの 第二集』1)

ベストセラーとなった『君の臍臓をたべたい』2)の著者、住野よる、が執筆した、大学図書館に勤務する女性とそのまわりで起こるできごとを描いたストーリー、『麦本三步の好きなもの』の続編、『麦本三步の好きなもの 第二集』が、刊行された。雑誌『ダ・ヴィンチ』に掲載された記事では、「前作からおよそ 1 年後、社会人生活 3 年目となった麦本三步の物語だ。本好きが高じて選んだ仕事は、大学図書館のスタッフ。「職場では」「先輩たちに指導されながら仕事に励み、一人暮らしのアパートでぐうたら極みを尽くす」とある。この記事の著者へのインタビューでは「『このシリーズは今のところ、9 冊出そうと思っているんです』との発言があり、今後の展開も期待される。3)なお、『麦本三步の好きなもの 第二集』単行本の表紙モデルは、前作『麦本三步の好きなもの』に引き続き「BiSH」のメンバーである、「モモログミカンパニー」が対応しており、書架への返本作業をしているシーンが「武蔵野プレイス」で撮影されている。4)

### ◎麦本三步と大学図書館

『麦本三步の好きなもの』では、「三步の職場は大学内にある」。「大学図書館で三步は働き、怒られ、たまに褒められ、そしてまた怒られる毎日を送っている」。「三步は基本的には図書館の仕事に気に入っている。本が好きだからという理由で、大学で司書資格を取った。

本に触れられる仕事なら、図書館員以外にも出版社社員や書店員という道もあっただろうが、三步が図書館員を選ぶ決め手となったのはその場所の匂いだ」5)。「三步は小さな頃から図書館に通い詰めている人間だった。本が好きなことと同時に、扉が開いた瞬間に感じられる、過去から未来、果ては海や時空さえ超えたような図書館の匂いが好きだった。「好きな空気の中で仕事が出来ているのだから、幸せだ」(pp.14-15)と、紹介されており、『ダ・ヴィンチ』の記事にあったように、「本が好き」で、図書館を勤務先としたことが書かれている。

#### ◎配架作業

『麦本三步の好きなもの』では、書架への本の返本作業の際に、「しゃがんだ状態で作業をしていた時に名前を呼ばれ」「後ろに伸ばした足にたまたま通りかかった大学の先生がひっかかって転んだだけだ。大したことじゃない」(p.18)というエピソードや、「配架、という言葉は三步が初めて聞いたのは、大学で司書課程を取る為の授業を受けた時だった。簡単に説明すれば、新たに図書館に入ってきた本や返却された本を本棚に並べることだ。それが配架。三步はこの作業が好きだ。「カウンターで図書館利用者の対応をしなくていい」というのもあるが、プラスの理由としては「本が無事、家に到着したのを見届ける作業であるからだ」(p.21)とされている。

#### ◎利用者への対応

『麦本三步の好きなもの』で、三步は「三階にはわりと人がいる。常連さんから一見さんまで。頼むから誰も問題ある行動を起こさなくてくれよ、とドキドキしながら本棚の並ぶ開架スペースに足を踏み入れる」。「問題のある行動自体も嫌だけれど、立場上それを注意しなくてはいけないのがもっと嫌だ。特に嫌なのは、外での常識的にはグレーだけれど図書館の常識的にアウトな奴」だと考えている (p.22)。館内での作業中に、茶髪の女の子から『お姉さん』と話しかけられ、叫び声をあげそうになるが、『何か御用ですか?』三步は態勢を立て直す。「相手は利用者、お客様とまでは言わないが敬意を払う必要がある」と考える。『本を探してるんですけど』『あ、なるほど、ちなみになんの本でしょうか』『ええと、ええ、これです』三步は差し出されたスマホを覗き込む。表示されているのはアマゾンの画面」というやりとりをしている場面がある (pp.23-25)。これは、不明本扱いになっていたものだったが、のちに、館内の三階で読んでいる学生がいたことが判明する。

また、三步がカウンターで事務作業をしている際に、利用者が声をかけてきて、「男子学生」が「昨日電話がかかってきて受付に呼び出された」と言う。先輩の職員が対応する様子について、三步は「神経はパソコン画面に向けて」いたが、「内容は聞こえてくる」。「どうやらずっと同じ本を借りっぱなしだった学生に返却督促の電話をかけ続け、結果的に見つからず弁償してもらったことになった」らしく「それが本意で彼はむすつとしている」とわかる。先輩職員が、お金を受け取って、領収書を用意するために裏に行っている間に、この

学生が友人と「大きな声で話し始める」。「図書館スタッフとしては注意はしなくてはならない。運悪く一番近くにいたのは三步で、苦手ながら立ち上がって『ちょっと』と声をかけた」が、「あまりに声が消極的すぎた。今度のもっと大きな声で思ったところ」で、先輩職員が戻ってきて、「『声のトーンをもう少し落としてくださいね』と」「注意をしていた。決して大きな声でなくとも、鋭い言葉でなくとも、ああいった注意の方法もあるのだ。三步も見習おうと思う」。先輩職員が、領収書とお釣りを渡そうとすると、「『ぼろぼろの本なくしたら金払わされてさ、あんな本程度でだりいわ』とカウンターの前で学生は友人に言うが、先輩職員はそれに対してやさしくとすように注意すると「男子学生は静かになって、一目散にカウンター前を立ち去り、図書館から出て行った」。三步は『人への怒り方を教えていただけませんか』と先輩職員に告げ、「三步の明らかにコミュニケーションが苦手だと分かるお願い」をきいて、ふたりは公立図書館での紙芝居の読み聞かせをするボランティアに行く (pp.92-101)。

『麦本三步の好きなもの 第二集』では、カウンターで三步が予約本を取りにきた利用者に対応するシーンが描かれている。「三步がカウンターで対応した利用者は、初めてみる男性」で「先日一般利用者登録をしたばかり」「以前に電話で所在を確認し取り置きを依頼した本を借りに来た」。「三步は自身が先週受けた電話のことでとすぐに分かった」ので、「カウンター内で予約本を並べておく棚を見る」が、そこには、置かれていなかった。「電話を受けた時、その本の所在を確認した。切った後にすぐ予約済み処理をパソコン上でしなければならなかった」が、カウンターが混んでいたため、予約処理のことを忘れてしまったのだ。三步は、誠心誠意謝った。「図書館で働いていれば、利用者からの小言や文句、お叱りを受けることはまあある」。「今回に関しては」「完全に三步のミス」「利用者側に落ち度は全くない」「三步は更に何度も頭を下げた」。大体的場合は、利用者も苛立ちをおさめてくれるが、このときはおさまらなかった。大学図書館で「午前中で少ないとはいえ、他の利用者もいる」ので、三步は「少しだけ、声のトーンを落としてほしいとお願いした。それが、相手の怒りに油を注ぐことになった」。先輩職員がバックヤードからやってきて、一緒に頭を下げ、いくつかの方法を提案しようとしたが、「頭に血が上った男性は二人の図書館スタッフへの罵倒を始めた」。「それを聞いた三步は、ミスをした自分とはもかく他のスタッフへの悪口は既に注意の域を超えていないか、それはもうただのクレーマーじゃないのか」とちょっとだけ思った。

男性利用者は『土下座して謝れ』と発言したが、先輩職員は『人として、図書館スタッフとしての、尊厳を傷つけるような行動はさせられません』と言って、さらに謝罪し、「腰を折って深々と頭を下げ」ると、警備員も近づいてきたためか、男性利用者は舌打ちをして『もういいよっ』と言い捨てた後に、図書館の入り口から出ていってくれた。先輩職員はカウンターの周囲にいた利用者にも、頭を下げ、警備員さんにもお礼を言う。先輩職員は、三步が「土下座しろ」と言われた時の対応について、『『非常識な要求を飲みこむことは、丁寧な対応でも何でもなし』『あの時三步が折れたら、あの人は他の図書館スタッフと同じこ

とを言ってもいいと思うかもしれない。それを見た他の利用者也真似てしまうかもしれない。だから、ミスよりも、そっちをよく考えて』と注意する (pp.324-333)。

#### ◎公立図書館でボランティア

『麦本三步の好きなもの』で、本の弁償をしてもらおう対応をしたあと、三步は先輩職員と公立図書館へ行く。「三步が今の家に住み始めてから一度だけ見学に来たことがある」「普段使うのは職場の図書館ばかりで通うことはなかったけれど、あの時興味津々に中を見て回ったので、構造までしっかり覚えている」。「基本的に甘ちゃんで、厳しいことを言われたくない三步」だが、ここで、アシスタントとして、エプロンを着けられ紙芝居の読み聞かせを先輩職員と一緒にすることになる。三步は「マジか」「人見知りのいちばんの天敵は子ども」なのに「私はなんとという人からなってしまったのだろうか」と考えるが、「今から帰りますという勇氣」もなく、子ども達の間中正座すると、女の子が三步の膝の上ののってくる。そのままの状態では紙芝居『ジャックと豆の木』を先輩職員が演じるのを、子どもと一緒にみていた (pp.101-110)。

『麦本三步の好きなもの 第二集』では、文具店で、紙芝居の時に三步の膝の上ののった女の子に再会し、いっしょに折り紙をする場面がある (pp.197-206)。

#### ◎図書館の広報活動

『麦本三步の好きなもの 第二集』では、ツイッターを活用して、大学図書館の広報活動を行う業務に、三步が新人の女性職員と対応する展開が描かれている。「三步ももう同じ大学図書館に勤めて三年目になる」(p.14)というところに、中国人の新人女子職員が入ってくる。「図書館でのバイト歴」(p.27)もあり、「三步達とは少し違った勤務形態での契約」「週に三日か四日出勤」「夜は大学院で勉強している」。「仕事について」は、「とてもまじめに業務を学びそのどれもを的確にこなしていった」(p.29)。

ツイッターで「図書館のオフィシャルアカウントを作る」ことになり、「普段から SNS 慣れしている」(p.118)のは、「職場の最若手、今年入ってきたばかりの新人」だろうと本人に確認すると、『「ツイッターとフェイスブックとインスタやってますっ。あとウェイボーっていう中国の SNS も」(p.122)と言ったので、「この図書館の最若手チームがツイッターの更新」をして、たまに先輩もチェックする、ということになる (p.127)。

三步と後輩の女子職員は「ツイッターでアカウント開設の挨拶を投稿」することにして「普段は行事の様子を撮影したりする為に置いてあるデジカメで、利用者が写らないよう閲覧室を撮影し、ツイートに貼りつける」。「今後図書館のホームページに URL を載せるし、大学側にも連絡してオフィシャルに宣伝してもらおうとは聞いたが、それ以外の方法は自分たちで考えてフォロワーを増やさなくてはならない」。「『他の大学図書館のアカウントをフォローして相互フォローしてもらいましょう』『うちの大学図書館のことをツイートしてくれる人を見つけてリツイートするか』『作家さんや本出してる学者さんのアカウントを

フォローしたら、ひょっとしたらフォロー返してくれたりするかも』などを、後輩の女子職員が提案する (pp.128-129)。

「三步にはツイッター上での悩みが二つ生まれた。一つは、図書館アカウントのフォロワーをどう増やすべきなのか。もう一つは、個人アカウントで人のツイートや写真を見る以上、自分もツイートしたり写真アップするべきなのか、共になかなか三步の頭を悩ませる問題であった」(p.138) というように、大学図書館の広報活動にツイッターを活用する作業に取り組む職員の対応や、その件に対する考えなどが描写されている。

#### ◎今後の展望

『麦本三步の好きなもの』では、「図書館勤務でなかなか出会いもなにもない」(p.165) 中でも、三步は「将来設計なども、諸々考えていることはあるが、ひとまずは現在の職場で図書館員として知識と技術を磨きレベルアップをはかる。そして今の先輩達のポジションにつき、この図書館で成り上がるのだ」。「そんなことを面談で閲覧スタッフリーダーに伝えようと、笑顔で『じゃあ麦本さんは来年度もこの図書館での勤務継続を希望ということで大丈夫ですか?』と大人の確認をされた。『はいっ』と、我ながらとても良い返事を三步はした」(p.231) という場面があった。

『麦本三步の好きなもの 第二集』では、「三步達の図書館内で、大学職員さん達の部屋は最上階にある」が、事務室宛の書類を「手に最上階へ。閲覧室の隅っこ。暑い扉に塞がれたその場所の前に立ち、職員室に入るような緊張感を持ってドアノブに手をかける」。「いつもいる仏頂面の職員さん達とは別に、三步達閲覧スタッフの統括を担っている外部の女性スタッフさんがいた」(p.289) というシーンがあり、子どもができたので、先輩職員のひとりが三月までで図書館を辞める、ことを知らされる (p.292)。三步は、「心配をかけたままじゃ先輩が安心して図書館を辞められない」「先輩の図書館での日々に憂いは残せない」と、張り切って仕事をするが、空回りして、ミスすることもあった (p.322-323)。

「麦本三步」というキャラクターと、その周辺の友人や職場である大学図書館の先輩職員・後輩職員との交流にまつわるエピソードが描かれている中で、大学図書館の状況やその運営のあり方に関係する内容にもふれられている。先に紹介したように、『ダ・ヴィンチ』に掲載されたインタビューでは、「このシリーズは今のところ、9冊出そうと思っている」という構想が披露されており、今後の展開が期待される。

#### 注)

1)住野よる『麦本三步の好きなもの』幻冬社、2019

住野よる『麦本三步の好きなもの 第二集』幻冬社、2021

2)住野よる『君の臍臓をたべたい』双葉社(文庫)、2017←双葉社、2015

ストーリーの導入部には、『君の臍臓を食べたい』学校の図書室の書庫。ほこりっぽい空間で本棚に並べられた書籍達の順番が正しいのか確認するという図書委員としての任務

を忠実にこなしている最中に、山内桜良がおかしな告白をしてきた」(p.5) というシーンがあり、学校の図書室や図書委員としての活動が、物語の背景となっている。

3) 「三步に対する思いは“めっちゃ腹立つけど愛してやまない”です(笑) 『麦本三步の好きなもの 第二集』住野よる こんげつのブックマーク EX②』『ダ・ヴィンチ』2021.4、pp.22-23

4) 住野よる「武蔵野の話」『note』2021.2.24

<https://note.com/voruvoruvoru/n/n59117a9f2286>

モモコグミカンパニーオフィシャルサイト「うたたねのおじかん」

<https://momokogumicompany.tokyo/>

5) 司書資格は、公立図書館を対象とする「図書館法」に定められた資格であり、大学図書館に採用されるために、司書資格が必要とされるわけではない。大学図書館や大学図書館職員を対象とする法律や資格は、存在せず、大学設置基準などで、大学図書館について定められている。2021年には、日本私立大学連盟から、「ポストコロナ時代」における大学のあり方の中で、大学の「図書館」に関する見解が発表され、それに対して、日本図書館情報学会からコメントも発表された。

一般社団法人・日本私立大学連盟「提言 ポストコロナ時代の大学のあり方 デジタルを活用した新しい学びの実現」2021年8月3日

[https://www.shidairen.or.jp/topics\\_details/id=3330](https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=3330)

一般社団法人・日本私立大学連盟 提言『「ポストコロナ時代の大学のあり方」における図書館等の記述について』2021年10月21日

[https://www.shidairen.or.jp/topics\\_details/id=3412](https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=3412)

2-3. 『虹いろ図書館のへびおとこ』『虹いろ図書館のひなとゆん』『虹いろ図書館のかいじゅうたち』1)

「柿ノ実町」にある「虹いろ図書館」と、その職員「イヌガミさん」を中心に、この図書館にあつまる子どもたちについてのエピソードを扱っている、『虹いろ図書館のへびおとこ』、『虹いろ図書館のひなとゆん』につづいて、『虹いろ図書館のかいじゅうたち』が発表された。著者の櫻井とりお、は「京都市生まれ。放送大学教養学部卒。都内区役所在職中、およそ10年間公立図書館で勤務。2018年第1回氷室冴子青春文学賞大賞を受賞、19年『虹いろ図書館のへびおとこ』で作家デビュー。20年度まで非正規職員として関東圏の公立図書館に勤めた」という経歴であることが、『虹いろ図書館のかいじゅうたち』の奥付に記載されている。

出版社のホームページでは、それぞれについて「内容紹介」として、

『虹いろ図書館のへびおとこ』2)

「いじめがきっかけで学校に通えなくなった小学6年生のほのか。居場所を探してたど

りついた古い図書館で出会ったのは——。「いじめがきっかけで学校に行けなくなった、小学6年生の火村ほのか。たどり着いたおんぼろ図書館でみどり色の司書、謎の少年、そしてたくさんの本に出会い、ほのかの世界は少しずつ動き出す！図書館があなたのところを彩る感動の物語」

『虹いろ図書館のひなとゆん』3)

「友達がいなくて小学4年生のひなと、世界を旅してきたゆん。ずっと友達でいられると思った二人だったけれど……本と図書館と物語を愛する全ての人に贈る『虹いろ図書館』シリーズ第2弾！」

『虹いろ図書館のかいじゅうたち』4)

「心凍らせた少女かおりといじめを受けた少年ケン。体の中にかいじゅうを飼い、出口を探す二人にイヌガミさんと図書館の人々は——？大好評シリーズ第3弾。世界は決してあなたを見捨てない。柿ノ実町にある古い図書館。司書のイヌガミさんは今日も大忙し。」「ある日図書館にやって来たのは、小学6年生のケンと、かおり。図書館と学校の図書室が居場所のケンは、クラスのはせがわくんにいじめられていた。お姫様の物語が大好きだったかおりは、ある出来事で心を凍らせている。イヌガミさんとうつみさん、スタビズくんたち図書館の人々と本のあたたかさが、二人の心をじんわりと溶かしていく——」

と紹介されている。

前号でとりあげた『教室に並んだ背表紙』については、その作者である、相沢紗呼『雨の降る日は学校に行かない』が「出版広告」で、「学校生活に息苦しさを感じている女子中学生の憂鬱と、かすかな希望を描き出す六つの物語」と紹介されていることにふれ、『教室に並んだ背表紙』も、同じ傾向の作品であることを紹介した。5)『虹いろ図書館』のシリーズでも、「いじめがきっかけで学校に通えなくなった小学6年生のほのか」(『虹いろ図書館のへびおとこ』)、「友達がいなくて小学4年生のひな」(『虹いろ図書館のひなとゆん』)、「心凍らせた少女かおりといじめを受けた少年ケン」(『虹いろ図書館のかいじゅうたち』)と、いったように「内容紹介」では表現されており、学校や友達になじめない子どもたちが、イヌガミさんをはじめとする職員がいる図書館を利用することによって、巻き起こるさまざまなできごとが、このシリーズで扱われている。ストーリー展開は多岐にわたるが、その中で図書館のあり方をめぐるさまざまな事象に関係した部分をとりあげた。

◎虹いろ図書館とイヌガミさん

『虹いろ図書館のへびおとこ』で、「柿ノ実町」にある「ねずみ色一色、コンクリートのつまらない建物」(p.8)と紹介される図書館には、「顔の右半分が緑色」(p.10)の職員がいて、その職員を「イヌガミさん」と呼んでいる子どもたちがいる。『虹いろ図書館のひなとゆん』では「イヌガミさん」について「『顔を見たらすぐにわかる。右半分の顔や手が緑でゴツゴツしてて、蛇の皮みたいに見えるせいで。生まれつきのアザなんだって』」(p.97)と



紹介されている。

◎「図書館の自由に関する宣言」

「図書館の自由に関する宣言」については、このシリーズの著作のなかで、複数回にわたって言及されている。

『虹いろ図書館のへびおとこ』では、火村ほのかが、図書館でみかける子どもについて、『あの子ってどういうつもり？ 毎日どこから来てんの？ なんであの部屋にずっといるの？ いったいつからいるの？』と、イヌガミさんに聞くと『ぼくには答えられない』『なんで教えてくれないの』『図書館は利用者の秘密を守る』『決まりなんだ。図書館員は、ここにだれがいつ来ているのか、ここでどんなふうにすごしているのか、どんな本を読んでいるのか、どんな本が好きなのか、そのほかいろいろ、見たり聞いたりしたことをほかの人に教えてはならない』『もし、ぼくが、』『だれかが毎日ここに来てますって、だれかに話したらどう思う？』。「あたしはその場にかたまる」。「そんなことするはずないってわかっているのに、おなかの底がすうっと冷えて、全身がふるえた」(pp.121-122)というやりとりがあった。

また、小学校の織田先生が図書館にやってきて、『火村ほのか、ここに来ていると聞きましたけど？』と、イヌガミさんにたずねる。『さあ、どうでしょう』『どうでしょうって、イヌガミ君』織田先生の後ろにいた、背の高いメガネの人が口を開いた。『カードや貸出の記録なんかで、来てるってわかるだろう？』といったのは、「図書館のえらい人」で「中央図書館の次長だか、課長」という人だった。『学校を欠席してます。家族とも連絡がつかなくて途方に暮れておまして』『このままじゃ、日数が足りなくて、卒業できないかもしれませんよ』という織田先生に、イヌガミさんは、『ぼくには答えられません』と、いって、本棚の方へ行ってしまった。怒った次長に対して、イヌガミさんは、『図書館は利用者の秘密を守る』つまらなそうな顔で、ふたりを見上げた。『図書館の自由に関する宣言』は、ご存じでしょう？ 図書館員は、だれがいつ来ているのか、そのほかいろいろ、見たり聞いたりしたことをほかの人に教えてはならない。ぼくだけじゃない。このだれに聞いたって、答えは同じです』『そんなもの、法的根拠でもなんでもない』次長はむっと顔をこぼらせた。『機転をきかせろ。学校も図書館も同じ役所どうした。先生もお忙しいなか、こうやって子どもを心配して、わざわざ来てくださってるんだから。おまえらのこだわりは、いつも時間のムダ使いだ』という次長に、イヌガミさんは、『あなたがた、本当に子どもを心配してるんですか』『結局、自分らが、仕事をなまけてると思われたくないだけなんじゃない？』という、織田先生は『そもそも、小学生が平日の昼間から来ていたら、学校はどうしたと問いただすのが、大人の常識ではないのですか？』といったが、イヌガミさんは『聞いたでしたら、その子はここに、もう来られない。次はどこへ行くんですか？ そうやって、子どもの行き場をなくし追いつめろというのですか？』といって『もし、その子を見かけることがあれば、先生が心配していると伝えましょう』『そうしていただけると…

…』というやりとりをしている (pp.151-156)。

現実には、学校の教員や、図書館の行政職に対してこのような発言をする図書館職員はまれだと思われるが、架空のストーリーとして、あくまでも「図書館の自由」の原則にそった対応をしようとする、職員の姿が描かれている。

『虹いろ図書館のかいじゅうたち』では、「図書館の正面玄関のガラスドアが壊される事件が発生し、それは「昨日。休館日の月曜日、朝の八時四〇分」であることが、「機械警備システム」によって、明らかになる。市立図書館は「金がないから、防犯カメラは取り付けられて」おらず、警備員がかけつけたときにはだれもいなかった、という。女性職員のひとりは、『割れ窓理論』をもちだして、『あんなふうに割れた窓やなんかを放置しておく、ここは壊していい場所だって思われて、治安が悪くなって、どんどん街の不良どもに壊されたり、ゴミを捨てられたりして。荒れ果てていくんだよ』という (pp.89-90)。中央図書館からやってきた次長は、女性職員に『こんなことになって、あなたもさぞ怖いでしょう？ それもこれも、ここでは学校にも行かないような子どもが複数たむろして、それを放置していた結果だと思うんですけどね。あなたもそう思いませんか？』といて、補修してほしいという要望に、予算の都合があり、『今はとりあえず、事件の全容を解明して、責任の所在をはっきりさせることが肝要かと思います』『何よりも必要なのは、ここにいる人たちの意識改革です。今までのやり方の、いたらない点はしっかり反省し、しっかり改めて、しっかり善処してほしいものです。「図書館の自由」なんて字面は美しいですが、あまり意味のないお題目にすぎることなく、役所のいままでのやり方を踏襲して、よりよい管理の在り方を学んでくれると、うれしいのだけどねえ』と発言する。次長たちが事務室に入ってしまったあと、子どもたちのひとりが『要するに、石で玄関ガラス割られたの、おれみたいな、学校行かない不良のせいだっていうこと？ この職員さんの意識が低いせいだってこと？』という、女性職員は『あんなやつ、何でも人のせいにしたいただけなんだから。わたしたちみたいな現場の非をあげつらつりゃ、自分らは仕事したと思込んでんの……』といている (pp.92-94)。この件は、その時刻に図書館の近くを通ったトラックのドライブレコーダーの記録から、「前に割り込んだ赤い車の前輪から、石がみごとな放物線を描いて飛んでいくのが、はっきり確認できた」(p.115-116)ということがのちに判明する。「図書館の自由」なんて「あまり意味のないお題目」としている、行政職員の存在が、描かれている。

#### ◎図書館の本について

『虹いろ図書館のひなとゆん』では、子どもの本だけで三万冊、全部で十二万冊くらいある本について、ゆんは『こんなに本があって、なんで、ごちゃごちゃにならないんですか？』と聞くと、イヌガミさんは『例外もあるけど、図書館の本にはここに番号がついています』背表紙の下のシールを指さした。『本の内容によって、番号をつけているんです。図書館の本はその番号順に並んでいます。どこの本棚に並べるか決まっているから、ごちゃごちゃ

にならないし、すぐに在りかがわかります』。「『まず、最初の番号でおおまかに分けます』  
『その次の数字でさらに細かく分けます』『たくさん本のある分野なら、さらに細かく数字  
をつなげます』『子どもの本は簡単にしてるけど、大人の本はもっと詳しく分けて、数字を  
長くつなげたり、著者の頭文字をつけたりします』『図書館では、この世にあるすべての事  
柄に数字をつけて、分類します』。「『本があれば、図書館はなんにでも番号を付けて分類し  
ます』『一冊の本に分類番号はひとつだけです』」と、ひなとゆんに、実際にさまざまな  
例をあげて、それが、どんな番号になるかをこたえながら、日本十進分類法（NDC）に  
ついて説明している（pp.122-129）。

『虹いろ図書館のかいじゅうたち』で、図書館の本について、「新しい紙しばいや本を買  
うと、同じ数だけ古い紙しばいや本を抜いて、保存書庫へ移さなければならない」ことを紹  
介し、イヌガミさんは、「『抜かなきや棚はどんどんきつくなる』『紙しばいも本も、未来に  
残さなければならない。時間がたって、たとえ本屋さんや出版社になくなくても、図書館に  
行けばいつでも読める、としなければならない。これも図書館の大事な仕事だ。だから、少  
し古くなったら、汚れたりこわされたりしないうちに保存書庫へしまう必要があるんだ』  
と、いって図書館の保存機能にふれている（pp.123-124）。

#### ◎レファレンス・サービス

『虹いろ図書館のかいじゅうたち』では、イヌガミさんが、ブックトラックに本を並べて  
いると、「がっしりした体格のおじいさんが声をかける。「質問の最初るとき、お客さんが言  
葉を探していればイヌガミさんはじっと待つ。せかすでもなく、誘導するでもなく、ただじ  
っと待っている。そうしていると、たいがいの人は落ち着いてくる」。『「ここいらへんの、  
地図を見たいんだが』』といわれると、「『どの程度のものがご入用でしょうか？ 市全体と  
近隣の市町村までわかるものや、一戸一戸が詳しくわかるものなどがありますが』』とい  
って、おじいさんが首をひねると、「『では、いくつか複数ご覧になってみますか？ 今、お持  
ちしますので、その閲覧席におかけになってお待ちください』』と対応する。おじいさん  
は『うん、わかった……あ、兄さん』『ありがとな、ご親切に』』という。「図書館には、毎  
日さまざまな質問が寄せられる。「本を探したり、図書館の資料を使って調べ物を手伝う仕  
事は、『レファレンス・サービス』と呼ばれ、図書館の大事な仕事のひとつだ」（pp.23-24）  
と、具体的な対応での会話の内容や質問事例をあげながら、この図書館での「レファレンス・  
サービス」と職員の対応について紹介している。

さらに、「児童室でも質問はたくさん寄せられる。「今は夏休み。自由研究や工作、読書  
感想文があるから、質問はいつもよりずっと多い。「そのたびに、イヌガミさんは」「フロ  
アへ出て行く」（pp.25-26）という、夏休みの児童室の状況も紹介される。

また、十一月には、「近くの小学校の六年生のふたクラスが、図書館に来ていた。班ごと  
に、それぞれ与えられたテーマをまとめて発表する。そのために、六年生たちは図書館の本  
を調べ情報を集めていた。「限られた時間内で、本を見つけなければならないので、みんな

必死だ。「その日はたまたまほかの仕事が重なり、ここでは対応できる図書館員はひとりだった。イヌガミさんは六年生たちに囲まれ、ひっきりなしに質問をぶつけられていた」という状況が描かれている (pp.47-49)。

#### ◎民間委託

『虹いろ図書館のかいじゅうたち』で、子どもたちのあいだで『『あそこの図書館さあ、つぶれるんだってよ』『おかあさんがいってたけど、つぶれるんじゃないかって、四月から全員、人がかわるんだって』『今の図書館の人たちは、どうなるの?』『たぶんクビんじゃない?』』という会話がかわされていた (p.122)。そのことについて、イヌガミさんは、『職員が変わるのは、市役所のえらい人が、もう何年も前に決めたことなんです』『四月から、図書館の職員は全員変わります。民間の会社が雇った人たちがここで働きます。新しく来る人たちは司書の資格を持っていて、今と変わらず一生懸命にしてくれる人たちだから、安心していいです』と説明する。「民間の会社が雇った人たち」については、『仕事ぶりはすばらしくて一生けん命なのに、お給料はとても安いんだって。不思議だね?』ケンがひそひそ声で付け加える。イヌガミさんは、『ぼくらはクビにならない。市役所の別の部署へ異動するんです』と説明する (pp.126-127)。

『虹いろ図書館のへびおとこ』の末尾では、小学校六年生だった「火村ほのか」が、「高校三年生」になっている (p.263)。「あいかわらず、図書館はかなりぼろい」が、「本の検索の機械や案内板が新しくなり、カウンターの職員さんはおそろいのユニフォームになった。なんだか、前よりか、いろんなものがきちんとしたみたい」という状況になっている (p.270)。イヌガミさんは、『『市役所の、障害者福祉の部署にいる。』『結婚して、子どもが最近生まれた』』ということが会話の中で明らかにされている (pp.275-276)。

#### ◎学校の図書室に担当者が配置

『虹いろ図書館のかいじゅうたち』で、ケンは、「ぼくは変わった子だから、先生からも特別扱いされていた」という。「先生になりたての女の先生で、とてもやさしくて、美人で、たまに教室でひとりであるぼくを見つけて、話を聞いてくれた。『『見学や休み時間の、好きなときに行っていいわ』』』といって、図書室のかぎを貸してくれた。「かぎを手渡すとき、白鳥先生が、ぼくの手にはさわらないように気をつけていることには、気がつかないふりをした」というケンの微妙な思いにもふれている。「ぼくの学校の図書室は、ふだんは放課後のちょびつとの時間しか空いてなかったんだけど、ぼくだけはいつでも入って本が借りられた」「貸出カードとかはない。借りたい人は『かしだしノート』に、日付と、時分と本の名前を書くだけでいい。」「借りて家に持って帰らなくても、ぼくは『かしだしノート』に、読んだ日付と、本と自分の名前を書いた。そうすれば、どの本を読んで、どの本を読んでないかわかる。」「学校の図書室はせまくて暗くて、本は少ないし古かった。」「でも、あのときのひとりきりの図書室は、まさしくぼくが王様の王国だった」 (pp.52-54) という状況だった。

ケン「休み時間や、プールの見学のとときにはひとりで図書室にこもった」が、「そんな安らぎの時間は、六年生になったとたん、すっかり変わってしまった」。新しい先生がやってきて、その「春原春美先生は、メガネをかけてころころした、やさしそうなおぼさん先生だったが、ほかの先生と少し違っていた」。「担任のクラスを持たない。職員室にもいない。春原先生がいつもいるのは、図書室だ。春原先生は図書室の先生、司書先生だった」。「司書先生は学校の図書室の、ありとあらゆることを変えてしまった」。「それまで鍵をかけていた図書室を解放し」「いつでも誰でも図書室に入れるようになり、「図書室の戸口は開けっ放しで、明かりがついていて、ほかの児童が大勢、出たり入ったりしている」。「なんだか怖くて、ケンは図書室に行けなくなった」ということになる(pp.155-156)。

「春原先生は授業で図書室の本を使えるようにした」。国語や理科などで、担任の先生が頼めば、そのテーマに関した本をたくさん用意してくれるという。図書室の本は全部読んでしまったケンが読んだことのない本が教室に届けられ、ケンはものすごく驚いた。「次の総合の授業は、図書室で春原先生がやる」ことになり、「今までの図書室は、すかすかな本棚と、テーブルと椅子しかない殺風景な場所だった。まず、新しい本が増えている。それもだた本棚に入れてあるばかりでなくて、小さなテーブルとか、竹で編んだかごとかに表紙を見せて置いてある。本のそばにはきれいなカードがついていて、この本のおもしろいところが書いてあった。カードがついていると、もう読んだことのある本まで、読みたくなってくるから不思議だ」。「『遠くへ行こう』というテーマで主に旅の本の紹介する授業で、春原先生はさまざまな本をとりあげ、「先生が紹介すると不思議にどの本も読みたくてたまらなくなる」。「図書室の貸し出しカード」がつくられていて、子どもたちにくばられ、「授業が終わるや否や、大勢の子がカウンターへ押し寄せた。紹介された本を早い者勝ちで手に取って、本を引っ張り合ってケンカになる子たちまでいた」。ケンは「この子たち、今までは、図書室にほとんど来たことなかったのに」と思った。「だいぶあとになって、ケンは、こういう本の紹介を『ブックトーク』と呼ぶことを知った」(pp.158-161)。

その日の放課後、ケンは新しいカードを手にして、図書室へ行って本を借りようとすると、ケンの名前を見た春原先生は、「かしだしノート」を取り出してきて「『これ見て感動しちゃった。あなた、図書室の本を全部読んじゃったのね、すごい』とケンに話しかけた。ケンは「図書室の本を全部読んだのはすごいことだって、ちゃんとわかっている人に、ちゃんとすごいって言われたかったのだ」。春原先生は「『そのすごいケンちゃんに、お願いがあるんだけど』『図書係になって図書館の仕事を手伝ってくれませんか?』という(pp.161-166)。

ケンは春原先生に、「図書室のことをいろいろ教わった」。「図書室の本は、背表紙に貼ったシールに書いてある、ふた桁の数字の順に並んでいるということ」や「貸出、返却のやり方」。スキャナーでバーコードをスキャンすることは「横で見ているよりけっこう難しい」。「それから、ケンは図書係の仕事に夢中になった」。「まず大切なのは、本の整理」で、「次に大事なのは、カウンターでの貸出や返却の仕事」だ。「下級生や同級生が来て、本の場所を聞いてくると」「ケンはその本をさっと取りに行く」。「何も見ないでまっすぐ行って、簡

単に本を見つけだすケン、みんなは尊敬のまなざしで見てくれた」という (pp.167-169)。

こうしたことがきっかけとなり、ケン「市役所に就職」し、「市立図書館の職員になった」。「働きながら大学に通って、司書資格を取った」。「毎日、がんばって子どもたちのために図書館で働いていたら、いつの間にかこんなおっさんになっちゃった」という後日談も紹介される (pp246-247)。

注)

1) 櫻井とりお『虹いろ図書館のへびおとこ』河出書房新社、2019

表紙カバーには、図書館の蔵書に貼付される、三段のラベル(赤・青)や、「禁帯出」(赤)、「書庫」(青)、「寄贈書」(黄)、と表示された、丸いラベルが、描かれている。

櫻井とりお『虹いろ図書館のひなとゆん』河出書房新社、2020

櫻井とりお『虹いろ図書館のかいじゅうたち』河出書房新社、2021

2) 『虹いろ図書館のへびおとこ』

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309028385/>

3) 『虹いろ図書館のひなとゆん』

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309029221/>

4) 『虹いろ図書館のかいじゅうたち』

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309030098/>

5) 佐藤毅彦「2021年 コロナウイルスと図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.68、2021.3、pp.77-116

### 3. 『図書室の奥は秘密の相談室』1)

前章で取り上げた『虹いろ図書館』シリーズの著者、櫻井とりお 2)による、学校図書館を舞台とした小説が刊行されている。

出版社のホームページでは、

『図書室の奥は秘密の相談室』3)

「リベルタス学園中等部図書委員 1年のはづきは図書委員初日に妖怪のような風貌の図書委員 3年のキサラギに『俺の助手になれ』と言われます。驚きつつもはづきはキサラギと個性豊かな委員たちと様々な相談事を解決していきます。はづきは変わり者のキサラギにどんどん惹かれていき!? ラストには思いもよらない『まさか!』が待っています」

と、紹介されている、

また、同じ著者による『図書室の奥はあやしい相談室』4)の刊行が予告され、出版社のホームページで、

『図書室の奥はあやしい相談室』5)

「リベルタス学園中等部図書委員には、新たに金髪のカイトと、はりねずみみたいな女子

のキョーコの一年生ふたりが加入。そして相談室を引き継いだはづきと図書委員たちが今回も様々な相談事を解決します！」「密室で割れた写真立て、本が落ちた本棚……怪異な出来事が図書館で頻発！ まさか図書委員の中に犯人がいる！？」

と、紹介されている。

#### ◎電子メディアに対応した中学校の図書室

『図書室の奥は秘密の相談室』の全体のストーリーは、中学校を舞台として、図書委員のキサラギたちが、さまざまなトラブルに関する相談をうけ、その解決に対応していくものだが、この中学校の図書室について、以下のような、電子化に対応した状況になっている姿が描かれている。

小説の冒頭、リベルタス学園中等部の新入生、井伏葉月を、図書委員会の湯川委員長が案内する場面で「お馴染みの図書室の香り。天井は吹き抜けになっていて、他の教室の倍以上に高い。正面と右手の壁は一面書架だ。階段状に続いて天井まで届く。磨きこまれた木製で、同じ素材のデスクや椅子も、古風ながらとても立派だ。「立派な書架の大半が……すかさずか。地上から三段ほどまでは埋まっているが、その上にはほとんど本がない」という状況にあることが示される。湯川委員長は『基本図書や、授業で使う資料、辞書や図鑑なんかはほとんど電子化されています。授業用のタブレットは受け取ってますよね？ 生徒ならいつでも図書室の蔵書にアクセスできます。でも、この書架はちょっとさみしいよね』。「数年前の電子化の時、紙の本を大量に処分してしまったそうです。生徒会の方針でね。その方針は今でも続いていて、紙の書籍を購入する費用はとても少ないの。残念です。こんな素敵な書架がたくさんあるのに』。「……今では 図書室にやってくる生徒も少ないの。電子書籍の貸出や返却の手続きは皆、オンラインで済むから」と紹介し、図書委員の一年生はふたりしかいないことについて、『希望する人だけってことになった』と説明する (pp.9-10)。

「入って左手に、どっしりした木製のカウンターがある。その上のノート PC で紙の本の貸出をするんだろう。私は小学校でも図書委員だったので、だいたいの見当がつく」と葉月は思い、「委員長はわきのドアを開けて」「『ここがワークルーム。本に図書室用のシールやカバーをつけたり、システムに情報を登録したり、購入する本を選ぶ会議をするの。でもたいていは暇な委員が集まって、おしゃべりしたりお弁当食べたり、そういう部屋です』と案内する (pp.10-11)。

ここで、委員の一人である、キサラギ先輩が、『相談室』を開いていて、「市立の図書館でも相談に答えている」「『司書が資料を調べて利用者の質問に答える、レファレンス調査』とは違い、『法的にはグレーゾーン』で『友だちの間でとか、部活でとか、ちょっとしたトラブルって起こる』『そういうのをキサラギ先輩は解決しちゃう』ののだという。『相談を引き受けて、それがうまく収まったら、相談を持ってきた人は報酬を支払うことになる』『うちの図書室の書架はすかさずか。紙の本の予算はかつかつに少ない』ので、『相談者には成功報酬として、こちらが指定した本を図書室に寄贈』してもらうことになってい

ると、説明される (pp.19-20)。葉月は、キサラギ先輩から『おれの助手になれ』と言われ、さまざまな相談事に対応していく。

注)

1) 櫻井とりお『図書室の奥は秘密の相談室』PHP 研究所、2021

2) 著者については、前章の記述内容を参照のこと。

3) 『図書室の奥は秘密の相談室』

<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-78973-6>

4) 櫻井とりお『図書室の奥はあやしい相談室』PHP 研究所、2022

5) 『図書室の奥はあやしい相談室』

<https://www.php.co.jp/books/detail.php?isbn=978-4-569-88038-9>

#### 4. 『ライブラリー・ツインズ ようこそ、月島大学図書館へ』 1)

著者の日野祐希は、「著者プロフィール」で「静岡県出身。小中高と図書委員で、大学では図書館情報学を学ぶ。2018年「第6回ネット小説大賞」にて受賞」とされている。2)

また、同じ著者による『菜の花工房の書籍修復家 大切な本と想い出、修復します』の出版社の著書紹介サイトでは「現在は愛知県で大学図書館職員」と記述されている。3)

『ライブラリー・ツインズ ようこそ、月島大学図書館へ』の「あとがき」では、「本作は、双子の中学生が大学図書館を舞台に、時に悩み、時に壁を乗り越えながら、全力で前へ突き進んでいく物語となっております」「大学図書館というと、中学生や高校生の方々にはなじみの薄い場所かもしれません。しかし、公共図書館や学校の図書室とは違う魅力に溢れた場所であると、私は考えております」「私も、高校生の頃にオープンキャンパスで初めて大学図書館に入った時の感動を、今でも覚えています。そして大学に入学してからは、多くの時間を大学の図書館で過ごしました」「そんな大学図書館の魅力を、本作を通じて少しでも皆様に感じていただけたら、とてもうれしいです」(pp.252-253)と書かれている。

#### ◎中学生が大学図書館でボランティア

中学生が大学図書館でボランティアをするというストーリー。月島大学付属中学校に通う、本郷菜織は、高校への内部進学を目指していたが、成績が足りず、担任から救済措置として、夏休みのホームカミング日に、大学図書館でのボランティアをすること提案される (pp.10-15)。双子の弟・健史をお目付け役に、担任の引率で、「ボランティアの初顔合わせと最初のミーティング」(p.18)のため、月島大学を訪問し、「サービス部門の係長で、今回のホームカミング日企画の担当者」である四十代くらいの女性職員山口さんと、「いっしょにボランティアをやる「大学院前期課程一年の真紀美鈴」さんと、と面談する (p.22)。

ホームカミング日企画では「貴重資料“世界の三大美書”の特別展示を含む図書館展示」



と「図書館で捨てることになった本や雑誌を販売するリユース市」のふたつのイベントをやることになっており、菜織は、ボランティアが一日ではなく五日間であることを聞かされ、衝撃を受ける (pp.26-28)。ふたりは、「特別展示される三大美書にちなんで企画展示の制作」と「ホームカミングデイ当日の解説」として「企画展示を、来てくれたお客さんに紹介するお仕事」を中心になってやってほしいと依頼される (pp.29-30)。

#### ◎大学図書館についてのオリエンテーション

ボランティアの初日、図書館のオリエンテーションに、「宮野課長」という「図書館の事務方一番偉い人」(p.43)があらわれ、月島大学図書館について、さまざまなことを紹介していく。図書館の蔵書八十万冊のうち、「図書館にあるのは約六十五万冊」で、「残りの約十五万冊は、先生の研究室や各学部の資料室に置いてある」と説明し、「図書館の資料は本だけじゃない。学術論文がのっている雑誌類も、図書館にはそろっている。まあ、最近紙の雑誌じゃなくて、オンラインで見える『電子ジャーナル』というものも多いけど」「電子ジャーナルというのは、高価なものが多くてね。雑誌担当者から値段を聞いたときに、私は胃が痛くなるよ」という大学図書館で扱っている資料の現状にふれている (p.46)。さらに、「大学図書館があるのは、何のためだと思う？」と質問し、「本を借りるのに便利だから」という回答にうなずき、「大学図書館の果たすべき役割とは何か。細かく見ていくといろいろあるんだけど、根っこの部分は一つだ。大学で行われる学習や教育、研究をサポートすること。大学図書館はそのために存在している機関なんだ」(p.47)と説明している。

そのため、大学図書館はそれぞれの大学に合わせた形へ特化していき、資料のジャンルについて、月島大学は文系の大学なので、図書館も文系の学術書が多いことを紹介し、「公共図書館や学校の図書室と違って、エンタメ小説などの、いわゆる娯楽のための本は少ない」。「中には『研究に必要なだから』って、逆に娯楽方面に特化した図書館を作ってしまう大学もあり、「たとえば、とある私大がマンガ図書館つくったりしている」(p.48)といている。また、年に一回、学生や教員にアンケートを行っていて、「毎年必ず、開館時間を延ばしてほしい」という要望があるが、「いろんな事情から、開館時間の延長は難しいらしい」と説明されている (p.49)。

大学図書館員は「いったいどんな仕事をしていると思うかな」と問いかけられた二人が、カウンターでの本の貸し出し、や、新しい本を買うこと、棚に並んだ本の整理、と回答すると、それに加えて「別の大学の図書館から文献のコピーをもらったり、本を借りたりもする」。「我々はいろんな仕事をして、あの手この手で図書館の存在をアピールしているんだ」とこたえている。四月に新入生の授業で図書館の使い方を教えていること、図書館を案内する『図書館ツアー』を実施することなどにもふれ、「『年に一回、学生の参加者を募って「選書ツアー」をやったりもしている』」といて、その内容について、「『学生といっしょに本屋へ行って、図書館におきたいと思う本を選んでもらおうんだよ。学生が本当に求めている本を、図書館へ入れるためにね。予算はうちの図書館だと一人につき、大体二万円くらいかな』

と説明し、図書館員側にとっても刺激になる、学生が選ぶ本は、『教科書的な本はもちろん、雑学的な本などもたくさん選ばれるから、こちらとしてもちょっと読んでみたくなる。私たち自身学生によって新しい扉を開けてもらっている気分になるんだ』と話している (pp.50-52)。他にも『為替相場を確認して、一喜一憂してる人がいる』。『電子ジャーナルも含めて、雑誌は外国の出版社から買うものも多いんだ。だから、外国のお金が日本円でいくらになるかによって、払う金額も大きく変わってきちゃうんだよ』と説明している (pp.53-54)。

#### ◎大学図書館内の施設を案内

女性職員の山口さんが、菜織たちふたりをつれて、図書館の中を案内する。一階の奥にある「ラーニング・コモンズ」は、「開放的な場所」で「大きく開けた空間に、ファミレスにあるようなボックス席やキャスター付きの移動できる机といすがいくつも並んでいる。ほかにもホワイトボードなどが置かれているが、逆に本棚の類はまったく見当たらない。なんだか、イメージしていた図書館像とはかけはなれた光景だ。「ここにいる人たちは、図書館の中だというのに、なんの気兼ねもなくペラペラしゃべっているのだ。図書館では静かに。そんなのは、菜織でも知っているあたりまえのことだ。けれど、ここではそれが全く守られていなかった」。案内していた山口さんは「『ここは議論する空間だから』と「あっさり」と学生たちのおしゃべりを認めてしまった」。『今の大学図書館には、こういう場所も必要なのよ。一人で黙々と本を読んで勉強するだけじゃなくて、多くの人と意見を交わし合える場にもなる。これも、今の大学図書館に求められる役割なの』と説明する。菜織たちには、違和感があり、カルチャーショックを感じるが、山口さんは「『一人で静かに勉強したい子もいるからね。そういう子たちは、別の階にきちんとスペースを用意しているわ。いわゆるゾーニング——住み分けてやつね』とつけくわえる。ここで、女子学生集団のひとりが山口さんに声をかけてきて、「友人同士とまではいなくても、かなりフレンドリーな雰囲気」で、菜織は、『図書館の人ってもっと近寄りたいたい感じかと思ってた。ほら、まじめでクールな感じで、話しかけ辛いっていうか』『ここに来て、図書館や図書館で働く人のイメージがひっくり返った気がする』と健史に話し、「ここに来るまで、図書館は堅苦しい場所、図書館員は怖そうな人たちと、菜織は思っていた。でも、実際に来て、話してみると、そんなことはないのだとわかる。少なくともこの大学図書館は、堅苦しさなんて感じない」とにもかかわらず、ここはいい場所だな、と菜織は素直に思った」 (pp.57-62)。

さらに、「新館の二階から上」は「たくさんの本棚」「が並び、学生が本を読んだり、勉強したりしている」。「それに、二階にはたくさんパソコンが並んだ、パソコンエリアがあった。今日はそれほど人がいなかったが、一週間前には多くの学生がレポートを書いていたそうだ」 (p.65)。「閉架書庫」には、「電動の集密書架」があり、「スイッチ一つでひとりで動く書架」で、「本をたくさん収納できる」。「本がどんどん増えていく図書館にとって、集密書架は、なくてはならないもの」で、「電動ではなくて手動の集密書架もあって、そこはハンドルを手で回して棚を動かしていた」 (pp.65-67) というように、館内の施設・設備が

紹介されている。また、「新館の地下にある貴重書室」の前室で、「世界三大美書」を閲覧している場面もある。3)

#### ◎企画展示の準備作業

菜織たちは「ラーニング・コモنزのボックス席」で、大学院生的美鈴と、企画展示の内容を決めるための会議をして、内容を『三大美書関連本の展示』と『本の製作風景』に決定する。菜織は、「期待に胸おどらせ」「みんなでがんばっていこう!」「オーッ!』という大きな掛け声とともにこぶしを突き上げる。「あまりに大きな声と仕草に、ラーニング・コモنزにいた学生たちが残らず振り返る。菜織たちは、一瞬にして学生たちの注目の的だ」となる場面もあった (pp.75-87)。

企画展示のための作業をラーニング・コモنزの奥にあるグループ学習室で行うことになるが、「グループ学習室は、文字通りグループで学習するための個室だ。グループ学習やプレゼンテーションの練習から、サークルの打ち合わせまで、様々な用途で使用されている」(p.88)。その設備については「ラーニング・コモنزのものより大きなホワイトボードがあるし、なんとプロジェクターまでついているのだ」(p.93)と説明される。ここで、企画展示に使用する本の製本などの作業を行っていく。

#### ◎図書館での本の探し方

企画展示に使用する、「世界三大美書」の関連本を書架で探す際、女性職員の手嶋さんは、図書館での本の探し方を説明する。「日本十進分類法」について、全部ではないが多くの図書館はそれを使っていると言ったあと、『この分類法の特徴は、主題——つまり、内容で本を分類していくことなの。だから、書架で棚を見ると、似た内容の本がいか所にかたまってくれるのよ』と話し、「月島大学図書館では、日本十進分類法で分類した上で、著者の名前順に本を並べている。「日本の図書館では一般的な並べ方」と説明される (pp 159-160)。

さらに、手嶋さんは『主題と分類番号なんて、図書館員でも暗記しきれいなものよ』『だから、基本的にはまず蔵書検索で本を探すの。というわけでこのパソコンの出番となります』と、パソコンは蔵書検索用のものであり、『インターネット経由で、うちの図書館が持っている本を調べられる』『キーワード検索ができる』が『それだと検索結果が多くなってしまふこともある。そういう時は、こうやって詳細検索ってところを開くの』と、タイトル、著者など、特定の項目で検索できることを説明する。検索して出てきた本のリストから、読みたい本を選んでタイトルをクリックすると、その本の詳細な情報が表示され、分類番号と著者記号をセットにした“請求記号”と、新館・旧館・研究室などの“配架場所”をみると、「本の在り処がわかる」と説明している (pp.159-163)。

#### ◎企画展示の実施

この大学図書館には「公式図書館キャラクター」があり、「卓上スタンドポップ」になっ

ているそれは「角帽をかぶってモノクルをかけ、とても大きな本を携えた白うさぎ」で、「三年前に学内でコンテストをやって決めた」もの。菜織たちを案内している、大学院生の美鈴が生みの親で『つくよみ』という (pp.182-184)。企画展示にお客さんがたくさん来てくれるよう「ウェルカムボード」をつくることになり、事務室にあった、A3サイズの紙を縦長に二枚重ねたくらい黒板タイプの案内ボードに、開催案内に加えて、『つくよみ』のイラストも書き添えられた (pp.188-193)。菜織たちは、企画展示に合わせて、「お土産付きの体験型」イベントをすることを考え、「スマホで検索」して「動画サイトに投稿された動画」(pp.199-201)から、「発泡スチロールに油性マジックで絵を描いて、スタンプを作る動画」をみつける (p.211)。そこから「発泡スチロールを使ったスタンプ作り」体験、を提案して実施し、スタンプが完成した後は、裏側に紙の持ち手をつけて、模造紙を用意して完成したスタンプをみんなにおして貰った (pp.221-224)。

来客数も多く、成功したイベントのあと、「みんなで記念撮影」することになり、展示の前に並んで、「かけ声に合わせて、次々とスマホのシャッター」が切られ、「菜織が返してもらったスマホを見ると、そこには誇らしげにほほ笑む自分たちの姿があった」(pp.242-243)。

注)

1)日野祐希・著、あけたらしろめ・絵『ライブラリー・ツインズ ようこそ、月島大学図書館へ』アリス館、2021

下記のアリス館のホームページに掲載されている、著作の紹介ページからリンクされている、図書館の注文票の短冊が付随しているページの「著者プロフィール」では「静岡県出身。小中高と図書委員で、大学では図書館情報学を学ぶ。2018年「第6回ネット小説大賞」にて受賞」と記載されている。

[http://www.alicekan.com/books/post\\_239.html](http://www.alicekan.com/books/post_239.html)

2)日野祐希『菜の花工場の書籍修復家 大切な本と思い出、修復します』宝島社（文庫）、2019

下記の「宝島社文庫」、日野祐希『菜の花工場の書籍修復家 大切な本と思い出、修復します』の紹介サイトでは、「現在は愛知県で大学図書館職員」と記載されている。

[https://www.cg-con.com/novel/publication/06\\_treasure/08\\_nanohana/](https://www.cg-con.com/novel/publication/06_treasure/08_nanohana/)

(2019.3.14 公開)

3) “世界三大美書”とは、以下のものがそれにあたるといわれている。

「ケルムスコット・プレスのチャーサー著作集」

「アシェンデン・プレスのダンテ著作集」

「ダヴズ・プレスの欽定訳聖書」

なお、下記において、これらについて、紹介されている。

「世界三大美書」『ミズノプリンティングミュージアム』

<https://www.mizunoprtech.co.jp/mpm/mpm01.html>

## 5. フィクションに描かれた多様な図書館

2020年について、2021年も、さまざまな形で図書館を扱った小説の続編が刊行されているということは、そうした作品が、一定程度、読者に受け入れられると、出版関係者が判断しているということかと思われる。そして、今回取り上げた作品の著者は、いずれも図書館の現状について、相当程度、状況を把握した上で執筆している。

『めぐりと私。』の大崎梢は、書店勤務の経験があり、出版流通業界に豊富な経験と知見を有しており、『本バスめぐりん。』の執筆に際しては、横浜市の移動図書館取材したことは、先にこの作品を取り上げて検討した際にふれた。1)今回は、実在の栃木県立図書館に創設された際の自動車文庫の歴史をふまえ、物語の視点人物である「節子」に関係する状況の時代的な変遷とかさねあわせて、架空の自治体（種川市）の移動図書館の職員との交流を背景にストーリーを展開している。その中で、「集団貸し出し」や当時の利用記録が残る貸出方式を取り上げ、読書と個人のプライバシーの関係性についても言及している。また、以前からすでに図書館業界内でも指摘されてきたような、現在の司書養成や就職状況にみられる問題点にふれつつ、図書館職員のライフストーリーと対応させて、物語を構成している。この本の末尾では、移動図書館を例に、公共図書館そのものの今後の在り方について、税金でまかなわれる公共サービス全般の存在意義が問われる中で、図書館のもつ可能性についてもふれている。

『麦本三步の好きなもの』の著者、住野よるは、ベストセラーとなった『君の膵臓をたべたい』でも、学校の図書室や、それに関係する生徒をストーリーに取り上げていたが、本作では、20代の女性である「麦本三步」（『麦本三步の好きなもの』では、「麦本三步は十七年学校に通いつけている」（p.14）とあり、大学卒業後、すぐに大学図書館の勤務を始めた状況にあると思われる。）を大学図書館に勤務する職員に設定し、職場での日常業務や友人、先輩・後輩職員との関係を描いている。対人コミュニケーションがやや苦手そうに見える三步（『麦本三步の好きなもの』では、配架作業が好きな理由について「カウンターで利用者の対応をしなくていい」（p.21）としている。また、カウンターの前で大きな声で話している学生に「一番近くにいたのは三步で、苦手ながら立ち上がって」（pp.93-94）声をかけて注意しようとしている。）が、利用者に対応する様子やクレーム処理対応などが、麦本三步の心理的な側面も含めて、ていねいに描かれている。学生が探している本についてスマホでアマゾンの画面を提示したり、大学図書館の広報をツイッターで実施する、など現代の大学図書館にふつうにみられる、電子メディアを使いこなすなげない光景もストーリーにとりいれられている。

『虹いろ図書館』『図書室の奥は』シリーズの著者、櫻井とりおは、「都内区役所在職中、およそ10年間公立図書館で勤務」「20年度まで非正規職員として関東圏の公立図書館に勤めた」という経歴であり、それがストーリーにも反映されている。たとえば「図書館の自由

に関する宣言」について、現場の専門職員と管理職との意識の差が、あらわれている場面がある。これは、米澤穂信『本と鍵の季節』2)でも、扱われていることを紹介してきたが、3)「図書館の自由に関する宣言」が、図書館現場で形骸化しているのではないか、という意識が、作家の中にも存在していることがうかがわれる記述となっている。民間委託については、「自由宣言」に関する場面ほど、批判的に言及されているわけではなく、図書館の職員は「民間の会社が雇った人たち」は「司書の資格を持っていて、今と変わらず一生懸命にしてくれる人たちだから、安心していいです」といって、自分たちは「市役所の別の部署へ異動する」と説明しており、ひとりの子どもが「仕事ぶりはすばらしくて一生けん命なのに、お給料はととも安いんだって。不思議だね？」(p.126)と「ひそひそ声で」話していることが、つけ加えられるにとどまっている。後日談としては、図書館職員だった人たちが市役所の他の部局などで働いていることも紹介されている。学校になじめない子どもが図書館を利用するストーリーは、昨年、取り上げた『教室に並んだ背表紙』で、中学校の図書室にやってくる女子中学生が図書室の業務を手伝うことで、やがて学校図書館を担当する人物となっていくことが扱われていた。4)今回の作品でも、学校の図書室の専任の担当者が配置されることで、図書室の模様替えや資料の充実などの変化があり、「総合」の授業を担当して、貸出の希望が殺到するなど、学校の図書室に変化が生じていくことが扱われている。学校の図書室をいつ使ってもいいと、図書室のかぎをはずけられていた子どもが、図書室に担当者が配置されることで、これまでとは違った図書室にとまどうが、やがて図書室の仕事を手伝うようになって、「図書室の先生」や「図書館のおにいさん」になりたいという気持ちをもつようになり、後日談として、図書館に勤務するようになっていたことまでが、描かれている。その他に、同じ作者の別の作品である『図書室の奥は』シリーズでは、電子化に対応した学校の図書室が舞台となっている。

『ライブラリー・ツインズ ようこそ、月島大学図書館へ』の著者、日野祐希は、図書館情報学を専攻し、大学図書館に勤務した経験があることが紹介されている。そのことで、電子ジャーナル、ラーニング・コモンズとゾーニング、など、学校の図書室や公共図書館ではみかけることが少なくとも多くの大学図書館でふつうに見られる存在がストーリーに登場している。大学図書館の役割として、学習・教育・研究支援をあげ、図書館員の業務内容としては、資料提供に関係すること以外に、図書館の存在をアピールすることとして、入学後の授業を活用しての図書館オリエンテーションや、図書館の館内ツアー、書店での選書ツアーの実施など、ボランティアのために大学図書館にやってきた中学生が、図書館活動の内容として想像する範囲としては思いつきにくい、大学図書館職員の業務内容について、具体的に説明している。また、中学生の大学図書館でのボランティア業務として、企画展示の手伝いをメインにすえており、中学生の公共図書館での職場体験を扱った、はやみねかおる『都会のトム&ソーヤ』5)では、仕事の内容として、書庫整理やカウンター業務、清掃、などに対応していたが、大学図書館を舞台としたこの作品では、その大学の特徴を反映させた企画展示やイベントが扱われている。

その他に、図書館における電子メディアの活用の方では、大学図書館で、探している本を示す際にスマホでアマゾンの画面を提示、ツイッターを使った図書館広報の実施、電子ジャーナルの提供、企画展示のイベント内容について動画サイトに投稿された動画をスマホで検索、電子化に対応した学校の図書室、などの状況が描かれており、図書館現場で電子化されたツールを活用している日常が、ストーリーに反映されている。

図書館の存在にかかわる事象については、移動図書館の廃止を例に、公共サービスの領域が再検討される中での今後の図書館そのもののあり方や、「図書館の自由に関する宣言」に対する現場での受けとめ方に関する職員間の温度差、民間委託の進行とその課題、などが扱われている。教育現場の図書館でも、学校図書館での担当者の配置による変化や、大学図書館の存在意義、職員の対応で「図書館の存在をアピールすること」の必要性が、職員の口から語られている。

施設・設備に関しては、公共図書館では民間委託による改装、大学図書館ではラーニング・commonsをはじめとしたゾーニング、学校では、担当者配置による図書室の模様替えと、別な作品では、電子化に対応して本を減らした図書館、が登場している。

注)

1)佐藤毅彦「図書館の多様化とフィクションの図書館」『甲南国文』vol.64、2017.3、pp.1-22

2)米澤穂信『本と鍵の季節』集英社、2018

3)佐藤毅彦「2018年の図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.66、2019.3、pp.1-24

米澤穂信『本と鍵の季節』には、登場人物の一人が、「『いくら宣言があったからって、実際に警察が来てどうぞご協力をとと言われて、できませんと断れる図書館ばかりだとは思えない。司書はともかく、図書館長ってのはたいてい、役場から派遣された図書館にはなんの思い入れもない人が就いてますからね』」と言っているシーンがあることを、上記で、紹介している。

4)佐藤毅彦「2020年 コロナウイルスと図書館状況と図書館小説」『甲南国文』vol.68、2021.3、pp.77-116

5)はやみねかおる『都会のトム&ソーヤ⑨ 前夜祭(EVE) 内人side』講談社、2011  
佐藤毅彦「2011年、東日本大震災の年に、図書館はどのように描かれたか：映像メディアとコミック・文芸作品に登場した図書館・図書館員にかんする事例研究」『甲南国文』vol.59、2012.3、pp.200-180、において、上記の作品について、扱っている。

## 6. おわりに

本稿の「はじめに」で、長濱ねるが、図書館に関係した情報を発信し続けていることについて紹介したが、そのほかにも、マスメディアを通して、多様な図書館の状況がさまざまな

かたちで報道されている。たとえば、『サンデー毎日』1)では、「こだわりの図書館を旅する」というタイトルで、「本好きには宝庫の図書館が、いま、各地で生まれ変わっています」として、「子ども本の森 遠野」「札幌市図書・情報館」「村上春樹ライブラリー（早稲田大学構内）」「那須塩原市図書館 みるる」「子ども本の森 中之島」などを紹介している。この記事で、ブックディレクター幅允孝氏は、世界的な傾向として、図書館の役割が「本が無料で借りられる場所から「教育とコミュニティの場所」へと変化している、として日本の図書館が「リニューアルに際して新しい図書館像を構築しようという工夫の“百花繚乱”が進んでいる」と述べている。また、『週刊朝日』2)では、そうしたケースの一例とも考えられる、神戸市立名谷図書館について、「大丸の須磨店（神戸市）は4階に神戸市が3月、名谷図書館をオープンさせた」と紹介している。

図書館の機能についても、NHKのニュースサイトで、「謎を突きとめる 図書館の力がすごかった」3)として、各地の図書館の「レファレンス・サービス」の実例が公開されている。また、女優の樹木希林が、最晩年に出演したことで知られる、映画『日日は好日』4)の原作『日日は好日「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』5)の著者である、森下典子『青嵐の庭にすわる「日日は好日」物語』6)では、プロデューサーである吉村氏が近所の図書館で、2002年に単行本が刊行されていた、この本と出会ったことが、映画製作のきっかけになったと語られている。

一方、図書館や図書館の職員については、たとえば、落語家（1978年生まれ）のエッセイでは、著者14歳のときに、ある歌手について「落ち着いた品のある容姿と乾き加減の声にときめいた。なによりその頃気になっていた市立図書館の司書さんに似ていた。少年が司書のお姉さんに惹かれる感じ……ご理解いただけますか？」と感じていたことが、書かれている。7)また、アニメ界に多大な貢献をしてきた辻真先（1932年生まれ）は、少年時代のエピソードとして「マンガにしる探偵小説にしる幼いぼくが好んだものは、大体において世間さまに爪弾きされていた。図書館の女性司書にこんこんとさとされた。『あんた、こんなものばかり読んでいたら、中学校へ行けないわよ』』といわれたことを、記している。8)

「戦後」のイメージについて、「さまざまなメディアが表象するイメージに注目することで、「戦後」を形成してきた複層的な問題系の絡み合いをさらに解きほぐすことを目指し」という『イメージとしての戦後』では、「戦後」のイメージはいったいどこから来るのだろうか」「その想起されるイメージはたとえ個々人で異なるにしても決して個人的な経験だけに起因するものではない」「私たちは完全に社会から孤立しないかぎり誰しも」「メディアによって伝えられるイメージの影響から逃れることはできない。個々が抱くイメージは、個人的な実体験の有無にかかわらず、メディアによってつくられる部分が大きい」（p.9）としている。

図書館についても、そのイメージは、メディアによって伝えられるものが、大きく影響している面があるのではないか。

2022年新春号『文藝春秋』巻頭のグラビアページでは、鷺田清一（元大阪大学総長）が、



東日本大震災の「発生から約五十日後に訪れたせんだいメディアテーク」を訪問。そこで『貸し出しカウンターに長い行列ができていたんです』『本の大切さを感じて、勇気づけられました』と言及している。9)

どんな状況においても、変わらない図書館のサービスの一面が反映されているともいえるが、一方で、今回取り上げたように、メディアの変化に対応した図書館の現状がフィクションの中にも描かれるようになってきている。

その一端を、この継続してきている考察の中で、明らかにできればと考えている。

注)

- 1) 「こだわりの図書館を旅する」『サンデー毎日』2022.1.23、pp.32-35
- 2) 「百貨店がモノを売らない時代に 家族で買い物、食堂で食事…はもう古い!」『週刊朝日』2021.12.24、pp.29-31
- 3) 「謎を突きとめる 図書館の力がすごかった」[NEWS WEB] 2021年4月28日  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20210428/k10013001701000.html>
- 4) 映画『日日是好日』公式サイト  
<https://www.nichinichimovie.jp/>
- 5) 森下典子『日日是好日 「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』新潮社、2002
- 6) 森下典子『青嵐の庭にすわる 「日日是好日」物語』文藝春秋、2021
- 7) 春風亭一之輔『人生のBGMはラジオがちょうどいい』双葉社、2021、p.73
- 8) 辻真先『辻真先のテレビアニメ道』立東舎、2021、p.57  
同書の表紙カバーには「1932年、愛知県生まれ」「数多くのアニメ脚本を執筆し、日本のアニメ界を黎明期から支えてきた」と記されている。
- 8) 坪井秀人・藤木秀朗編著『イメージとしての戦後』青弓社、2010
- 9) 『文藝春秋』2022年1月号 巻頭 グラビアページ 鷺田清一 元大阪大学総長後に、鷺田氏はメディアテーク館長として招かれている。

(本文中で参照した web ページは、2022年2月の時点で公開されていたものです。

\*一部のサイトについては、「公開終了」)